

スペースア的

歴史・景観

の活かし方

掘り起こし、磨き、光らせよう

～西尾市城下町地区における

歴史を生かしたまちづくり・景観づくりへの取り組み～

伊藤 彩子

古くからまちが発達したところでは、昔の道筋や町並みなど、歴史を伝えるものがたくさん残されている。歴史的資産は市民にその存在が広く認知され、大切にしたいと思われることによってはじめてまちの宝と言えるようになる。昨年度西尾市で取り組んだ調査では、城下町を「まちの宝」とするためにどうしたらよいかということをも市民自らが考えた。



市民の方々と一緒につくった「西尾城下町の景観づくり方針」。堀の内側の範囲が旧城下町であり、土塁や道筋など城下町の骨格を生かしながら、各通りで特色を出しているという内容になっている。

城下町の骨格が残る
抹茶・植木の産地として名高い西尾市は、もともと西尾城の城下町を核として発達してきたまちである。昨年度、西尾商工会議所を事務局として、地域住民、行政、学識者などからなる「西尾城下町再生委員会」が結成され、城下町から受け継がれる文化を現代に生かしたまちづくりを考えるための調査を実施した。

西尾城は石高六万石であった。名古屋城が六十二万石だったので、十分の一の規模である。侍、商人、百姓が混在する城下町の周りを堀と土塁が取り囲む「総構え」と呼ばれる形式が特色となっている。外堀の総延長は約三キロメートルであり、徒歩圏で完結したまちが形成されていた城下町は、今日的課題である「コンパクトシティ」の原型であるとも言える。

戦災を免れており、戦後もまちの構造に大幅な変化が加えられることがなかったため、現在でも城下町の町割りや歩い確認できる。自然の高低差を利用して築かれた土塁・堀の跡が残り、街路も基本的に城下町の往還が継承されている。また、城内に入るために「五か所門」と呼ばれる五つの通用門が設けられていたが、門に付随する「枡形(ますがた)」と呼ばれる広場の跡が、現在でも屈曲した道に姿を変えて残っている。

主要な道沿いの町並みは昭和初期の道路拡幅により、一新された。特に、モータリゼーションが発達するまで西尾の商業の中心地であった本町では、拡幅に伴い造り直された「ハイカラな」町並みが現在も残っている。木造建築の正面をモルタル塗りしたり、洋風の瓦屋根を載

せた建物が何棟も見られ、独特のモダンな雰囲気を出している。このように、異なる時代の風景が積層しているところが西尾の魅力と奥深くしている。

歴史を見えるようにする工夫が必要
調査の中で、西尾市教育委員会の松井直樹氏や観光ボランティアさんに案内してもらいながら、市民委員が城下町を歩いた。城下町に住んでいてもじっくりまちを歩くという機会はありません。まち歩きの後日に、「歴史を活かした景観づくりのためにどんなことをしたらよいか？」というテーマで話し合ったところ、「市民がもっとまちのことを知らなければいけない!」という意見が数多く出された。具体的には「歴史を伝える案内看板がもっと必要」「子どもによる町並み写真コンテストを開催しよう」などの提案が出された。

内・解説といったソフトな取り組みを同時に進めていくことが必要である。

新しいものを古いものに馴染ませる努力
古いものを生かすと同時に、新しくつくるものを古いものに馴染ませることが大切であるという議論もされた。西尾駅から城下町に向かう、中央通りと塩町通りという二本の東西道路があるが、これらの道は現在拡幅整備が進行中である。沿道の建物については景観的な検討もな自由な建築を認めているため、既に整備済みの区間では雰囲気の違う建物が立ち並んでいく印象になったり、空き地が目立つところがある。古いものと調和しつつ、新しいデザインを入れていくという努力が必要であり、拡幅工事のように大々的な改修を行う場合には、事前に沿道景観の望ましいあり方について検討しておくことが必要である。

印象的だったのは、最後の委員会の時に市民から、「土地を一番高く買ってくれるのはマンション開発業者。つい売りたいという誘惑にかられるが、高い建物がたくさん建つと、天守閣から城下町を見通すという構造が壊れる。そうならないように早く手を打たなくては」という発言があったことだ。みんなで一緒にまちを歩いたり、議論したりしたことで、このような発言ができたということに非常に感激した。市民の方々は、「お金が手に入るなら歴史なんてどうでもいい」と思っている訳ではなく、まちについて理解すれば、歴史を活かした低層な町並みづくりに共感してくれているのである。

まちのあちこちに歴史を伝えるものがたくさん残っている。そのことを市民が知らなければ「まちの宝」とは言えない。城下町はかつてどんな風だったのか、その名残が現在どこにどんな風に残っているのか、それはどんな意味を持っているのか、ということが市民に認知されて初めて、人々は自分の住んでいるところがどんな場所であるかを知り、歴史を大切にしたいと感じるのである。

そのためには、歴史的な遺構をそのままにしておいては駄目で、何らかの手を加えて存在をアピールすることが必要である。西尾でも城址の一部を「歴史公園」として整備しており、「丑寅櫓(うしとらやぐら)」の再建や内堀の整備が行われ、城があったことがわかるようになってきている。また、惜しまれつつ取り壊された大正末期の百貨店である旧井桁屋の跡地、旧井桁屋の所有者である吉見家の旧宅が市によって活用されることが決まっている。このように、歴史を具体的な形として見せるハード整備と、史跡の案

具体的取り組みに向けて
今回は商工会議所が中心となって、歴史を活かした景観づくりの方向性をまとめた。昨年三月に策定された第六次総合計画の中には、「景観法をふまえて、市民と協働で市の景観形成に関する基本計画を策定」と書かれており、今後は市も一緒に具体的な取り組みを進めていく必要がある。